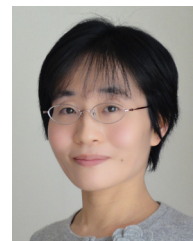


# 傷の手当。

皮膚科・小児科  
多摩ガーデンクリニック  
むとう みか  
武藤 美香

日本皮膚科学会認定皮膚科専門医  
日本アレルギー学会正会員



傷の手当てといえば、「消毒して、薬を塗って、ガーゼ・包帯をする」あるいは「消毒して、乾かす」と答える方が多いと思います。私も7から8年前までは、疑いもなくそのような治療をしていました。傷や火傷の治療で皮膚科に来院された患者さんに、「傷は消毒しないくださいね」とお話しすると、「えっ?」と怪訝な顔をされる方がほとんどです。次に「それでは石鹸と水で洗いますね」と実際に治療を始めると、患者さんは不安な表情です。最後に「傷を保護する人工シート(創傷被覆材)」を張りますね」と説明を始めると、患者さんはどうとう我慢できなくなり、「薬を塗らなくて、本当にいいのですか?」と尋ねてきます。そこで今日は「なぜ消毒が必要なのか」「なぜ消毒してはいけないのか」についてのお話をしようと思います。

一つ目の理由は皮膚に

は常在菌がいるため、細菌に対する防御機構が十分に備わっているからです。ただし、体液が循環しない部分(壊死組織や異物など)があると、細菌が繁殖するのに絶好の環境となってしまう。これらを除去して石鹸と流水できちんと洗えば、感染することはほとんどありません。

もう一つの理由は、消毒薬は細菌を殺すために必要な濃度をすぐに保てなくなるので、意味がなくなるからです。それどころか、消毒薬は傷を治すために再生しようとしている細胞を次々に殺してしまいます。

また、従来の方法で傷を長期にわたり治療していると、消毒薬や外用薬による「かぶれ」を起こしてきて、消毒すればするほど傷がどんどんひどくなっていくことが頻繁にあります。そのために、消毒しない傷の治療法を行う医療機関が増えていくのです。